

実践の根拠

三 枝 孝 弘

1 愚者になりて

「人は、時々、自分を馬鹿だと思ふ。自分のような馬鹿者はいないと思ふ。然しその癖、『あなたのような馬鹿者はいませんね』と他人に言われると、かっと目を剝いて怒る。つまり自分を本当に馬鹿だとは思っていないのである。どこかに自分を買ひ被っていて『あの人よりはまだまだ』などと思っているのである。その上、いつの間にかわずかばかりの学問や教養を取り沙汰し、賢しら顔して名聞利養の思いに住し、挙句の果ては人を誇り、論議問答しては勝他の心を満足させる。……人のかかる姿は、もともと馬鹿げた状態であって、今更愚者となるのではない。愚者となるということは愚者である自分の元の姿本来の姿に立ち返ることであるといつてもよいであろう。」(傍点原文のまま)

これは、酒井源次先生の近著『歎異抄に学ぶ——その解釈と解説——』(昭和60年4月刊、信濃教育会出版部)の一節である。

先生は、長野県伊那小学校の今日の実践の根拠となるものを据えられた方である。伊那小学校は、テレビや雑誌などで有名である。今日のマス・コミの時代では致し方がない。実践にたずさわっているものにとって重要なのは、有名とか無名ということではなくて、その根拠に何があるのか、ということである。

われわれの教室実践、授業において、それを成り立たせているものは一体、何であろうか。

いわゆる教科書の教材を解説することで、授業が成立しているという安易な考えが、自分の心の中に巣くっているのではなからうか。

先生は、この書物において、伊那小学校の「総合学習」「内から育つ」「自ら学ぶ」という実践の「発想の視座となる考え方」を明らかにしようと努めたつもり、といわれている。

「人は、時々、自分を馬鹿だと思ふ。」これはまた、自分の本来の姿であろう。本来、愚者である。「そこ」が大事なところである。にも拘わらず「自分を本当に馬鹿だとは思っていない。」

それどころか「いつの間にかわずかばかりの学問や教養を取り沙汰し、賢しら顔して名聞利養の思いに住

し……勝他の心を満足させる。」とある。歎異抄本文の「あやまて学問して名聞利養のおもいに住するひと……」の箇所にあてはめてである。

2 エゴイズム

「我々の教育愛というのは、そこに在職し担任する自分の都合上のある機関の中での限られた愛育のことなのであろうか。もし、そうだとすれば、それは職業的愛、限定愛、相対的愛というべきであって、愛の本質ともいうべき、愛の無限性とはおよそ異なるものというべきであらう。そうした程度的な愛ではとても満足しきれないとして、仮に小学校から中学校に至るまで担任し得たとしても、果たして、その愛を成就し得るであらうか。」われわれの愛は「中途半端な愛なのである。その中途半端な愛を、まことしやかに持ち回して、いわば見せかけの、ほどほどに慈愛しているのである。なぜそうなのであるか。愛の成就のためには、それを貫くためには、わが家族も、わが身の破滅がそこに横たわるからである。それほどの犠牲がそこに存するからである。それを成し遂げ得ないのは、自分の身のほうがかわいいからである。わが愛を貫くためには、わが身に巣喰う己の利己心、抜き難いエゴイズムがそれを阻んでいるからである。……自己内奥にとぐる強大なエゴのその事実、全面的に気付くとき人はついに自己を投げ出さざるを得ない。抜き難い者としての、その自己について脆かざるを得ない。」

中途半端な子どもへの愛を、まことしやかに持ち回して、と先生はいわれる。自己を投げ出さざるを得ない、救い難き者としての存在、いわば自己を超脱した世界に自己を放棄しながら、なおかつ、その自己に「ついに」脆かざるを得ない、という、「そこ」が問題なのであろう。「ついに」のもつ意味は、われわれの存在の根柢を衝く。実践の根拠への問いである。

歎異抄本文の「大慈大悲心」にあてはめての箇所である。教育愛については、通常、ヨーロッパ流の解釈によれば価値愛と平等愛との統一、あるいは交錯という構造がうかんでくるにちがいない。しかし、「煩惱無尽」の自分にとっては、どうしようもない構造である。分析し、統一するという格好の世界では存在し得ない。

「そこ」のところが、どうわかるか、ということである。自己への執着、価値への執着、固執は捨て切ることができない。思えば思うほどそうである。

これがごくふつうの人である。こうして、人は、「ついに」自己を投げ出さざるを得なくなり、「その自己についに跪かざるを得ない」のである。

「ついに」のおひとことは、われわれの根柢をたとえようもなくゆさぶる。

「私達の教室活動を顧みるとき、私達は、何かを少し子供達にしてやると、『私がこんなにやっていのにお前達は……』と、すぐ思いたがることはあるまいか。」とも先生はいわれている。

子供達のために、〇〇のために、ということの思い上がり、を鋭くつかれている。これはまた、「自己内奥にとぐろする強大なエゴ」にどうしようもない、自己への固執、執着である。

3 「そこ」について

本来、愚者である。「そこ」が大事なところである、と前述した。また、自己に「ついに」跪かざるを得ないという、「そこ」が問題なのであろう、とも述べた。そしてまた、煩悩無尽の自分と分析・統一の世界との間、「そこ」のところが、どうわかるか、ということにもふれた。

授業において、教師は、どれほど自己を断念することができるのだろうか。わずかばかりの知識の切り取りと「賢しら顔」、 「そこ」に埋没している自己に気づいている人は、そう多くはない。大学から小学校に至るまで、およそ教師という存在は、そのようなものであろう。そういう自分こそがまずそうである。その愚かさに気づきながらも、それを越えることができない。固執、執着をたちきろうとしながら、なお心のどこかに、その片鱗をとどめている存在、それは、他ならぬ自己である。

このことは、教室実践において、どのような意味もっているのだろうか。酒井先生の無尽の御心にふれ得ないことを愧じながら少しくのべてみたい。

まず第1に、授業にあたって、自分は、教材ばかりに目を向けていて、生徒を見ていないのではないか、ということである。教材は、とくに中等教育にたずさわっている教師からみれば、既知の対象であり、その扱いも慣れている。安住の地である。安住の地にいつまでも留まりたいのは、人情である。これも愚者である自分の本来の姿であらう。しかし、この既知の世界への安住が、「賢しら顔して」生徒たちの前にあらわれてくるとき、そこには「自己内奥にとぐろする強大なエゴ」が君臨し、愚者であることが忘れられる。

自分を馬鹿だな、と思う。それはそれでよい。けれ

ども、生徒たちに対して、「お前は馬鹿だ。馬鹿な奴だ」「こんなことがわからんのか」ということ、あるいは、そう思うことがあろう。しかし、そのことは、何を根柢にしていえること、思えることなのだろうか。

「こんなこと」というのは、「そこ」に何が潜んでいるのだろうか。このことを少しづつあきらかにしていくことが、授業の本来の姿なのではなからうか。生徒とともに愚者の姿にもどることである。「馬鹿な子だ。あれには往生する」ではなくて、「とともに」愚者になりて往生する、「そこ」が、実践の境目である。

心は万境に従って転ず、転ずるところ実に能く幽なり、という趣旨のことばを教えて下さった方がおられる。転ずるところ、そこは、まさに「そこ」であり、「幽」である。このような授業でありたい。

第2に、このことは、具体的には、授業の目標、目標の達成、というプロセスの中に、いやプロセス自体の中心に、生徒を措定する、ということとなる。今更わかりきったことともいえるかもしれない。生徒が中心になって、ということは、よくあちこちで聞くことばである。しかし、このことは、具体的に授業の中でどのようなことになるか、ということになると、依然としてさっぱりである。学校の目標には麗々しく生徒の個性を尊重しとか、美辞が掲げられていても、授業の具体の相をみると、テスト、暗記、罵声の連続あるいは無感動の日々である、という状況がきわめて多い。

「中途半端な」「まことしやか」な論を持ち回して、生徒たちの動きをおさえつけようとする。生徒たちがこわいからである。教材の明瞭性に比べるべくもないほど、生徒たちは、不明瞭・不分明である。不分明なところ、くらやみは、こわい。これも人情である。しかし、人はまた、くらやみをのぞきたがる。くらやみも、じっと思いをこらしてみれば、やがてぼんやりと何ものかがうかんでこよう。生徒たちをみることである。よくみることをとおして、実は、自分がみえてくるのであろう。

われわれの実践は、どうも、知識の伝達におわりかねない。大切なことは、子どもが、自分で自分の生きるすべを身につけていく、その方法を身につけることであらう。「身」につけるは、みずからの心と体の渾然としたところである。そのためには学習に当たって、心と体が動かざるを得ない、そのような状況を用意することである。中等教育において、このことはどのようにして可能であらうか。

子どもをみるとは、単なる分析・統一のためではなく、煩悩無尽の自分を問うためである。否、ためではない。存在にたちかえること自体である。「そこ」で、われわれは、「ついに」自己に跪かざるを得ない。

—1985年5月5日—